

授業を支える「チーム・ティーチング」(TT)

1 テーム・ティーチングとは

特別支援学校では、ほとんどの授業がTTで行われており、欠かすことのできないものとなっています。TTは、授業、児童生徒の学びを支えていると言えます。

TTは、1950年代にアメリカで始まった教育形態で、1960年代に日本に紹介されました。日本の障害児教育では、養護学校教育義務制に向けた複数担任制と、その後の教員定数の改善の流れの中で、障害の重度化・多様化に対応する方策として全面的に取り入れられ、一般的な教育形態として定着していきました。

TTの定義は、「2人以上の教員がチームを組み、児童生徒の教育に責任を持って当たる協力型の授業組織である(Shaplin,1964)」が一般的です。「協力教授」「協力教授組織」などと訳されています。

TTは、「複数の教師がチームとなり、各教師の特性を生かしながら、一つの子ども集団を対象に、指導の全部または一部について共同で責任を負い、協力して指導に当たること」なのです。

2 テーム・ティーチングを生かした授業

TTによる授業の特質は、学習集団を構成する児童生徒一人一人の課題に、きめ細かく対応できることにあります。

【TTの有効性】

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| ① 個々に即した対応／集団運営が可能になる。 | ⑤ 多面的な視点での子ども理解が高められる。 |
| ② 集団での多様な活動を用意しやすい。 | ⑥ 互いの発想・方法が刺激となり実践が高められる。 |
| ③ 集団での活動を組みやすい。 | ⑦ 効率的で手厚い事前準備が可能になる。 |
| ④ 子どもへの幅のある対応が可能になる。 | |

3 テーム・ティーチングを有効に進めるには

TTを機能させるためには、授業づくりの各段階(1. 指導計画の立案、2. 必要な教材・教具の準備、3. 指導の実施、4. 評価と反省)において、教師が協同で進めることが大切です。そして、各段階で、教師同士が授業に対する十分な共通理解を図ることが必要です。

【TTで共通理解する内容】

- | | |
|------------|---------------------------------|
| ① 子どもの個別目標 | ④ 展開や活動内容、個別目標を考えたTTの指導・支援内容の確認 |
| ② 授業展開 | |
| ③ 役割分担 | ⑤ 評価(児童生徒の姿、教師の手立て) |

効果的な指導にするには、④の充実を特に心掛けます。

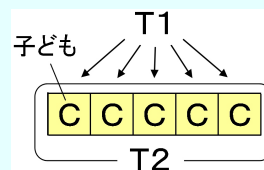
これらの共通理解が不十分だと、必要のない支援で子どもの気付きや問題意識、動きを制約したり、教師の役割や責任が分散したりすることがあるので、注意が必要です。

4 ティーム・ティーチングによる学習形態

TTによる学習形態は、大きく次の6種類に分類することができます。

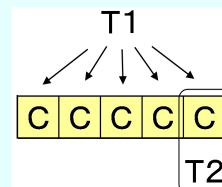
I 単集団（全体支援）型

- ・ T 1 が全体を進める。T 2 は、集団全体を見ながら、支援が必要な子どもを支援する。T 2 は学習課題の理解を助ける、活動を補助するなど、課題や場面に応じた支援を行う。



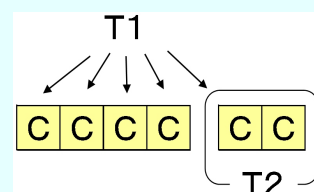
II 単集団（個別支援）型

- ・ T 1 が全体を進める。T 2 は、特定の子どもの支援を担当する。
- ・ 全体の授業のねらいに沿って、担当の子どもが同じ学習活動を行えるよう支援する。
- ・ 学習集団が比較的等質で、特定の子どもの支援が必要な場合に用いられる。



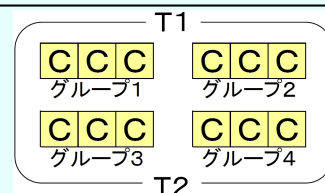
III 単集団（小グループ支援）型

- ・ T 1 が授業を進め、T 2 は、支援が必要な複数の子どもの支援を担当する。
- ・ 全体の授業のねらいに沿って、同じ学習課題でなく、特別な課題や実態に応じた課題を設けて学習する。



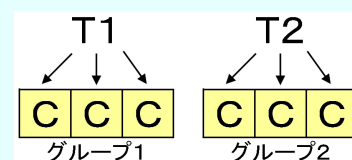
IV 複数集団（グループ巡回支援）型

- ・ 小集団で学習を進め、教師はグループ間を巡回して指導する。
- ・ 同じ課題や異なる課題、等質、異質集団など、活動内容や集団編成に多様な幅がある。



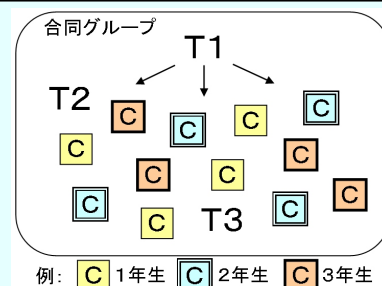
V 複数集団（グループ分担支援）型

- ・ 小集団で学習を進め、教師は担当するグループで指導する。
- ・ 同じ課題を少人数で、細やかな配慮で学習したり、子どもの様子に応じて設定された異なる活動をしたりする。
- ・ 同じ教室内など、共通の場で行うと、教師間で学習進度を調整し合いながら進めることができる。
- ・ 別教室など、離れた場所で行うと、学習や活動内容に幅を持たせることができる。

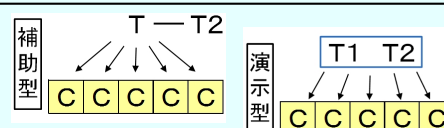


VI 集団連結（合同学習支援）型

- ・ ダイナミックな活動をねらい、大きな集団で学習する。T 1 が全体を進め、T 2 などが支援する。(I型と同じ)
- ・ 複数学年、学部全体といった集団で行うことで、活気あるダイナミックな活動が期待できる。
- ・ 集団が大きいため、有効に機能するためには、事前の打合せを十分行うことが必要である。



※ T 2 が T 1 を補助する「補助型」(例：音楽で T 2 がピアノを弾く)や、T 1 と T 2 が交互に指導する「演示型」(例：子どもの前で演じて見せる)を加えることもあります。



ここでは、基本的なモデルを示しましたが、実際の授業では、目標やニーズ、教員数、学習スペースなどに応じて、複数の形態を混合、組み合わせ(例 導入：全体 [I+II型] → 展開：グループ [V型] → まとめ：全体 [I+II型])など、様々なバリエーションが考えられます。授業をスムーズに進めるために形態を選ぶのではなく、目標や学習課題に応じて形態を選択、工夫することを大切にします。

5 ティーム・ティーチング Q & A

Q：朝の会を3人の教師で行っています。子どもが主体的に取り組めるようになってきたので、TTの在り方を見直したいとき、どのような工夫が考えられますか？

A：子どもの育ちとともに、TTの位置や教師の人数を見直すとよいでしょう。

ここでは、右の図のような配置で朝の会を行ってきたようです。そこで、次のような指導手順を考えました。

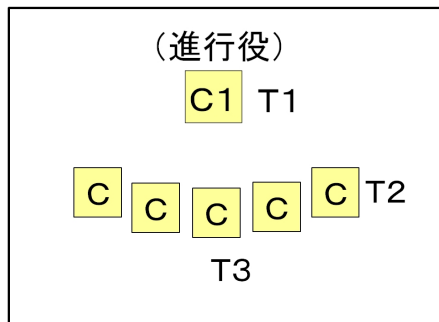
ステップ①：T1が朝の会を進行する

ステップ②：T1が進行役C1について指導する

ステップ③：C1が進行する

今、ステップ②まで進んだと考えられます。③に進むために、教師の位置や人数を考えます。（例：T1がT2、T2がT3の位置に移動し、2人の教師で行う。）

T1が横に移ることで、子どもが向かい合う関係になり、子ども同士の関わりが増えていくことも期待できます。更に次のステップとして、後方から見守る教師1人での朝の会が可能になるかもしれません。



Q：児童10人の体育を3人の教師で指導しています。集団が大きく待ち時間が多くなり、活動が確保できません。どのように工夫したらよいでしょうか？

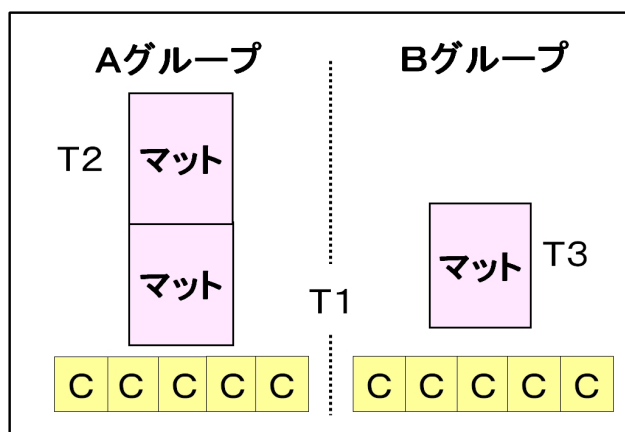
A：そのような問題を解決するための形態として、グループ分担支援（V型）を提案します。

2グループに分かれて活動することで待つ時間が減り、活動動を増やすことができます。

ある程度技能が高まっている子をAグループにし、マットを2枚にして更に活動量を増やします。

活動量よりも技能習得のために丁寧な支援が必要な子をBグループとします。

教師の配置と役割については、T1が両グループの子どもの様子を見ながら、待っている子どもの見守りと働きかけを行います。T2、T3がそれぞれのグループのマットにつき、子どもの運動に支援を行います。そのことで、教師一人一人の役割や支援内容も明確になります。次の授業につながる、授業後の評価をしっかりと行うことが大切です。



Q：TTによる評価のポイントについて教えてください。

A：複数の教師で評価を行うと、教師によって評価の違い（ずれ）が生じます。この違いを大切にしましょう。違いが生じた理由を検討する中で、評価方法を見直したり、教師が子どもを見取る目を高めたりすることに価値があるからです。もちろん、共通の基準に基づいて評価した上での違いでなければ意味がありません。ですから、「共通理解する内容」として挙げたように、目標の各観点で、一人一人が目標を達成した姿などについて、共通理解できていることが前提となります。

Q：TTで気を付けなければならない点はどんなことですか？

A：TTを有効に進めるために、共通理解すべきことなどを書いてきましたが、他にもTTによって陥りやすいマイナス面で、次のことに気を付けましょう。

- ① 教師がお互いに依存的になり、子どもへの働きかけが滞ることがある。
- ② T2、T3などの教師の働きかけが、子どもの補助や管理だけに終始することがある。
- ③ その場限りの対応となることがある。

これらが起こらないようにするために、

- ◎ TTを行う教師全員が「授業の主体者」という意識を持つこと
- ◎ 年齢、経験の違いがあっても、教師がお互いの考えを尊重し合うこと

が大切です。

以前は、TTの教師を「メイン・ティーチャー、サブ・ティーチャー」と呼んだ時期もありましたが、最近では、T1、T2と呼ぶようになってきました。それも、全ての教師が授業を進める主体であることを意識できるようにするためなのです。